

「すみれ色のあなたに」 作 木庭由莉子 潤色 柴幸男

登場人物

- ・私（さき 高校二年生）
- ・父
- ・すみれ色のワンピースを着た女性（亡くなったさきの母）
- ・そよ風
- ・つむじ風
- ・からっ風

やわらかな風の音。

舞台がゆっくりと明るくなる。

広い草原にすみれ色のワンピースを着た一人の女性が立っている。

顔は見えない。

そよ風に吹かれワンピースと髪の毛がなびいている。

瞬間、大きな風が吹き、草原と女性は消える。

舞台はさきの部屋になる。

さき、机に向かって勉強している。

部屋のドアをノックする音。

コンコンコン。

父の声「まだ勉強してるのか？」

さき「うん」

父、ドアを開けてさきの部屋に入る。

父「お茶、置いとくよ」

父、そう言ってお茶をさきの机の上に置く。

さき「ありがとう」

父「（その場に立ったまま、動かない）」

さき「…え、なに？」

「すみれ色のあなたに」

父、さきの机の上にある母が写った写真を見つめている。

父「もうすぐ…母さんの命日だな」

さき「え？ …あ、そっか」

父「母さん、あっちでも元気してるかな…」

さき「またお母さんの話？ もうやめてよ…。明日、テストなんですけど」
父「ああ、ごめん。悪かった。勉強、頑張れよ」

父、出ていく。

さき「…」

さき、勉強を続けようとするが、手を止める。
母の写った写真を見つめてつぶやく。

さき「お母さん…」

そよ風、窓から入ってくる。

そよ風「ヒューッ」

さき「さむっ！ 窓閉めよっど…、って誰?!?!」

さき、そよ風の存在に気づく。

そよ風、ささやく。

そよ風「そよ風」

さき「え？」

そよ風、今度は大きな声で言う。

そよ風「そーよーかーぜ！」

さき「うわああ、びっくりした…、急に大きな声出さないでよ」

そよ風「ドッキリ大成功☆」

そよ風、そう言ってさきのベッドに腰掛ける。

そよ風「わーこのベッドふかふか」

「すみれ色のあなたに」

そよ風、ベッドに座って上下に揺れている。

さき「勝手に人のベッドに座らないでよね。それで何？ そよ風くんが何しに来たの?。」

そよ風、にやりと笑う。

そよ風、ベッドから立ってさきに花を渡す。

そよ風「はい、これあげる」

さき、受け取る。

さき「え？ あ、この花すみれだ」

そよ風「そう。すみれの花だよ」

さき「すみれ…か」

そよ風「ね、すみれ見に行かない?」

さき「え？ 今から？ もう外真っ暗だよ？ それに、私中間テストの勉強しないと…」

そよ風、さきをじっと見つめる。

さき「おーい、そよ風くん？ 聞いてます?」

そよ風、さきを見つめたままゆっくり言う。

そよ風「すみれだよ、さきのお母さんが好きだったすみれ」

さき、動揺する。

さき「え…、何で知ってるの?」

そよ風、明るい声で言う。

そよ風「ね！ すみれ見に行こう!」

さき「…でも、どこに咲いてるの?」

そよ風「すぐそこだよ！ ほら、あのドアから行けるよ!」

そよ風、そう言って部屋の隅を指差す。

「すみれ色のあなたに」

すると風が吹き、小さな扉が現れる。

さき「え！ そんなところにドアなんかあったっけ…」
そよ風「いいからいいから」

そよ風、さきの手をひいて扉の前まで行く。

さき「な、なんか展開はやくない？」

そよ風、立ち止まってさきの方を振り返る。

そよ風「あのー、ひとつ言わせていただきますが、私一応女の子だから、そよ風ちゃんまでお願いします」

さき「え？ あ、女の子だったの？ だったら、もっとこーなんていうか女の子って感じの雰囲気出してほしいんだけどな…」

そよ風、さきをにらむ。

さき「冗談、冗談！ ごめんね、そよ風くん。じゃなくてそよ風ちゃん。えへへ」
そよ風「えへへでごまかすなー！」

そよ風、扉を開ける。

扉から光が溢れ出る。

さき「うわっまぶしい」

さき、眩しくて目を閉じる。

そよ風「ヒューッ」

そよ風、いなくなる。

さき「(目を開いて)…え、」

広い草原が広がっていてすみれの花が一面に咲いている。
太陽がキラキラと輝いている。

さき「あれ？ そよ風くん？ (口を押さえて) あ、また間違えちゃった！ そよ風

「すみれ色のあなたに」

ちゃん？ どこ？」

さき、辺りをキョロキョロ見渡す。

さき「いない…」

さき、景色を眺める。

さき「うわあ…、綺麗…」

さき、足元のすみれを見つめる。

さき、ふと向こうの方に座っている女性がいることに気づく。

さき「誰かいる…」

さき、そばに行こうと走り出すとその女性は消える。

さき「え…、気のせいかな…。でも、確かに女の人がいた…」

すると、また少し向こうの方にさっき見た女性が立っている。
その女性はさきの方を向いて微笑んでいる。

さき「あ！ さっきのー！」

さき、走って近づこうとするもまたその方の女性は消える。

さき「消えた…、でも、あの女の人、私を呼んでるよね…。それに、どこかで会ったことがあるような…。(なにかに納得したように) よし」

さき、歩き出す。

短い風の音。

すると道が二つに別れる。

さき「別れ道…、どっちに進もうかな…」

そこにつむじ風がやってくる。
つむじ風ダンス。

つむじ風「ヒュルーンッ、やあ、僕はつむじ風。」

さき「そよ風ちゃんがいなくなっただけだと思っただら今度はつむじ風くん？ それにしても、そよ風ちゃんにそっくりだね」

つむじ風「まあ、僕ら双子だからさ。あ、道に迷ってるんでしょ？」

さき「うん。女の人を探してるんだ」

つむじ風「なるほどね…。道、教えてあげてもいいよ」

さき「え？ ほんと？！」

つむじ風「うん、ま、今から僕がだす問題に答えられたら、けどね」

つむじ風、ウインクする。

さき「え？ 何それ？」

つむじ風「問題です！ その対象は物だったり友達や先生だったり時には自分だったりする。そしてそれは偶然で運命で、新しい世界に入る第一歩となる。もちろん、ハズレもある。でも、その全てに意味がある」

さき「え？」

つむじ風「繰り返します。その対象は物だったり友達や先生だったり時には自分だったりする。そしてそれは偶然で運命で、新しい世界に入る第一歩となる。もちろん、ハズレもある。でも、その全てに意味があるんだ。さて、なーんだ」

さき「もっと単純なのかと思ってたけど、なんか深い…。うーん…。ね、ヒントちょうだい？」

つむじ風「そうだなあ。君も生まれてから何度も経験してるよ。それについさつき僕と君は…？」

さき「あ！ 出会った！ 出会いた！」

つむじ風「そう！ 正解は『出会』！」

さき「やった！ 出会いの全てに意味がある、か。君、いいこと言うじゃん。あ、そーだ、道、教えてくれるんだよね？」

つむじ風「あ！ そーだった！ うーんと…右に…曲がればいいと思う」

さき「何、その『思』って。それ、ほんとにあってるの？」

つむじ風「大丈夫大丈夫。僕は今『右』っていう直感に出会ったんだ」

さき「その出会い、ハズレじゃないよね？」

つむじ風「ああ。あたりに決まってる！ 僕は直感に強い男なんだ」

つむじ風、キメる。

さき「よし、じゃ、右に行くか！」

つむじ風「おいおい、スルーするなよおお」

「すみれ色のあなたに」

つむじ風、泣きそうな顔をする。

さき「へえー、以外とメンタル弱いんだ」

つむじ風「それ言われたらさらに落ち込むよおお」

さき「ごめんごめん。じゃあ、君の直感を信じて右へ行くよ！ ありがとう」

つむじ風、さきを見送りながらつぶやく。

つむじ風「この先も君に素敵な出会いがありますように」

間。

つむじ風「メンタルやられた」

つむじ風、消える。

さきが歩いていると雨が降ってくる。

さき「わあ！ 雨だ！」

さき、近くに屋根のあるベンチを見つけ、駆け込む。

からっ風、屋根の下に走ってくる。

さき「ー！」

からっ風「あー雨だー」

さき「あなたは？」

からっ風「私はからっ風。そよ姉ちゃんかつむ兄ちゃんの妹だよ。はい、濡れてるとこ拭きなよ」

からっ風、ハンカチをさきに渡す。

さき、受け取って拭きながら。

さき「これぞ女の子！ 誰かさんとは違うわー。ありがとう」

さき、ハンカチを返す。

雨が強くなる。

さき「雨、止む気配ない…」

からっ風、雨の中へ。
からっ風ダンス。

からっ風、傘を二本持っている。
さき、つぶやく。

さき「傘二本、女子力高い…見習おう」

さき、傘を指さして。

さき「ねえ、からっ風ちゃん、この傘一本私に貸してくれない？」
からっ風「いいよ！ あーでも、私の出す問題に正解できたらね！」

からっ風、ウインクする。

さき「またか…わかった！」

からっ風「では問題です！ 私たちはみんな、誰かと関係を築いたり、何かを使った
りするけれど、いつか必ず終わりがくる。私とさきとの間にもね。でもそれは何かの
始まりでもあるんだよ。繰り返しします。私たちはみんな、誰かと関係を築いたり、何
かを使ったりするけれど、いつか必ず終わりがくる。私とさきとの間にもね。でもそ
れは何かの始まりでもあるんだよ」

さき「なんだか寂しいな…ヒント、くれない？」

からっ風「じゃ、大大大大ヒントだよ！ それは、いつも出会いとセットなんだ」
さき「わかった！ 別れ…だよね？」

からっ風「そう！ 正解は別れ。別れて寂しいけど、別れがあるから私たちは変化
し続けられる。そして強くなれる」

さき「そっか…別れにもそんな意味があったんだ…」

からっ風、傘をさきに渡す。

からっ風「はい。気をつけてね！」

さき「ありがとう」

からっ風、さきを見送りながらつぶやく。

からっ風「この先もあなたが笑顔でいられますように」

間。

からっ風「女子力高いって褒められちゃった！ そよ姉ちゃんに自慢しよーっと」

からっ風、消える。

さき、傘をさしてしばらく歩いていると雨がやみ、傘を閉じる。
すると向こうに女性がいるのに気づく

さき「あっ」

さき、かけよる。

女性は座ってすみれをつんでいる。

女性「…」

さき、緊張している。

さき「こ、こんにちは。」

女性「こんにちは」

さき「あ、あの、すみれ…お好きなんですか？」

女性「ええ」

さき「私のお母さんも…もういないけど、すみれが大好きな人だったんです」

女性「そうだったのね。すみれって、とっても小さいけれど、素直で真っ直ぐで飾り気のないところが私は大好きなの。あなたもすみれは好き？」

さき「はい。でも…お母さんが亡くなる前まではどうしてこんなに小さな花が好きなんだろう、もっとゴージャスで大きくて目立つ花はいっぱいあるのになって思ってしまった」

女性「そうだ、すみれの花言葉、教えてあげるわ。すみれの花言葉はね、小さな幸せなのよ」

さき「小さな幸せ…」

女性「そう。大きな幸せばかりに目を向けていると、足元にある小さな幸せに出会ってもそれを幸せのかげらだと気づくことが出来ない。道端に咲いているすみれは小さくて目立たないけれど、そのすみれを見つけた時、小さな幸せを感じられる人でありたい。私はそう思うわ」

少しの間。

さき「私…一年前にお母さんを亡くして…幸せを失ったんです。私にとっての一番の幸せはお母さんだったんです。でも…それに気づいたのはお母さんが亡くなって

「すみれ色のあなたに」

からで：私は、お母さんがいることは当たり前なことだと思ってた。私は素直になれなかった。あんなにも愛情を注いで育ててくれたのに：どうして、どうして気づけなかったんだろう：」

女性、さきの手をとる。

女性「ねえ、泣かないで。あなたはこれから一歩ずつ一歩ずつ前へ進んでいく。お母さんはあなたの中にちゃんという。だからもう過去を振り返らなくていい。これから出会う小さな幸せを大切にするのよ。そうすればいつかそれが大きな幸せになる。あなたのお母さんも喜んでくれる。きっと、お母さんにとっての幸せは、あなたにとっての幸せだけ」

さき、ゆっくりうなづく。

女性「さ、もうそろそろそよ風があなたを迎えに来るわ」

女性、すみれをさきの頭につける。

女性「ふふっ、とっても似合ってる」

さき「可愛い。ありがとうございます」

そよ風、やってくる。

そよ風「ヒューッ」

女性、消える。

さき「あ！ そよ風ちゃん！ あれ?!?! あの人：」

そよ風「もうすぐ、この世界とのお別れの時間。行こう、さき」

さき「あ、うん」

二人、歩き出す。

二人でダンス。

しばらく歩いていると扉が見えてくる。

さき「もう、お別れ？ なんか寂しい：」

そよ風「ねえさき、後ろを振り返ってごらん」

さきの後ろにはつむじ風、からっ風。
そして、すみれ色のワンピースを着た女性が立っている。
みんなさきにはほえみかけている。

さき「え？ いつの間に！」

そよ風「さ、この扉が消える前に元の世界へ帰らないと」

さき「うん。分かってる…でも…なんだか寂しくて」

さきが、つむじ風、からっ風、女性の方へ体を向ける。

さき「私はみなさんから大切なことを教わりました。出会いにも別れにも意味があると知りました。そして、小さな幸せを見つけていこうと思えるようになりました。私は前より少し強くなった気がします。自分で言うのは恥ずかしいけど…：…ありがとうございました」

さき、お辞儀をする。

そよ風「行こっか」

さき「うん」

そよ風、扉を開ける。

さき、もう一度振り返る。

みんながさきに手を振っている。

さきも手を振る。

さきとそよ風、扉の向こうへ。

灯りは女性だけを照らす。

女性「さき、あなたに会えて嬉しかった。あなたの幸せを願っているわ」

暗転。

鳥の鳴き声。

舞台、ゆっくりと明るくなる。

さきの部屋。

朝になっている。

さき、自分の机に突っ伏して寝ている。

部屋のドアをノックする音。

父の声「さきー、起きてるか？ 朝だぞー」

さき、目を覚ます。

さき「あれ？ 夢…？」

そよ風（本当の風）が窓から入っている。

さき「そよ風…」

父がドアをノックする音。

コンコンコン。

父「さき、起きたか？ もう八時だぞ」

父、そう言ってドアを開ける。

さき「おはよう。お父さん、私、すごい夢を見た。すみれが好きな女の人に会ってね、すみれの花言葉教えてもらったんだ。それと…風さん達にも会った。なんだか少し生意気だったけど」

父「その女の人はすみれの花言葉がなんと行ってた？」

さき「小さな幸せって言ってた気がする」

父「さき、それはきつとお母さんだよ。お母さんはよくお父さんにすみれの花言葉のことを話してたんだ。≪小さな幸せ≪ってな」

さき「お母さん…」

父「お母さんはきつとさきに思いを伝えたかったんだよ。いい夢を見たな」

さき「うん。私、すみれが大好きになったよ」

父「良かった良かった。ところで、さきは今日からテストだっけ？」

さき「あ！ やばい！ 勉強してな〜い！！」

さき、慌てて、片付けたり、散らかしたり。

父、笑いながら、部屋を出ていく。

ゆっくりと舞台は暗くなる。

終わり。